夜釣の怪

池田輝方

青空文庫

私の祖父は釣が所好でして、よく、王子の扇屋の主人や、千住の女郎屋の主人なぞと一緒に釣に行きました。

これもその女郎屋の主人と、夜釣に行った時の事で御座います。

川がありまして、土堤が二三ヶ所、処々崩れているんだそうで御座います。

其処へこう陣取りまして、五六間離れた処に、その女郎屋の主人が居る。矢張り同じように釣棹を沢山やって、角行燈をつけてたそうです。

祖父が釣をしていると、川の音がガバガバとしたんです。

それから、何だろうかと思っていると、旋てその女郎屋の主人が、釣棹を悉皆纏めて、祖父の背後へやって来たそうです。それで、

「もう早く帰ろう。」というんだそうです。

「今漸く釣れて来たものを、これから？　帰るのは惜しいじゃないか。」と言ったが、何でも帰ろうというものですから、自分も一緒に帰って来たそうです。

途中で、「何うしたんだ。」と言ったが、何うしても話さなかったそうです。その内千住の通りへ出ました。千住の通りへ出て来てから、急に明るくなったものですから、始めてその主人が話したそうです。

つまり「釣をしていると、水底から、ずっと深く、朧ろに三尺ほどの大きさで、顔が見えて、馬のような顔でもあり、女のような顔でもあった。」と云うのです。

それから、気味が悪いなと思いながら、依然釣をしていると、それが、一度消えてなくなってしまって、今度は判然と水の上へ現われたそうです。

それが、その妙な口を開いて笑ったそうです。余程気味が悪かったそうです。

それから、この釣棹を寄せて、一緒にして、その水の中をガバガバと掻き廻したんだそうです。

その音がつまり、私の祖父の耳に聞えたんです。それから、その女郎屋の主人は、祖父の処へ迎いに来たんです。

楼へ帰ってからその主人は、三月ほど病いました。病ったなり死んでしまいました。

夜釣に行くくらいだからそう憶病者ではなかったのです。水の中も掻き廻わしたくらいなのですけれど、千住へ来るまでは怖くって口も利けなかったと言ってたそうです。

それから私の祖父も釣を止しました。大変好きだったのですが止してしまいました。

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選・特別篇　百物語怪談会」ちくま文庫、筑摩書房
　2007（平成19）年7月10日第1刷発行
底本の親本：「新小説　明治四十四年十二月号」春陽堂
　1911（明治44）年12月
初出：「新小説　明治四十四年十二月号」春陽堂
　1911（明治44）年12月
入力：門田裕志
校正：noriko saito
2008年9月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夜釣の怪

池田輝方

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/